

肥後の中世城館跡と隈部館跡

大田 幸博

(熊本県立装飾古墳館長)

熊本県では、文献上、最も古い中世城が球磨郡錦町の球磨川右岸の丘陵地に残っている。岩城跡で、「高野山文書」に城名の記載がある。このことで、城と表現できるものが、平安時代末には既に存在していたことがわかる。城跡内からは、昭和60年代初期に、この時期に見合う同安窯青磁（中国産）が数多く表採されていた事がある。ただし、発掘調査が実施されていないので、考古学的な実証には至っていない。城の縄張りは、年月を経る中で、その都度変化を遂げていくので、早期の岩城は、今と違う形態であったかも知れない。

城の基本概念は、あくまでも「固定的で恒久的な意味を持った施設」を意味するもので、単に築地塀を廻らす程度のものでは城と呼ばない。平安時代末の城は、『平家物語』に記載があるように、せいぜい「関」程度のものと考えられる。本来、中世城は、武家社会の中で武将の活動拠点であったが、鎌倉時代でもその成立は、時期尚早と考えられる。時の將軍の源頼朝でさえ、鎌倉の地に城郭と呼べる構築物を築いていない。地方の武士団にあっては、なおさらのことであろう。この時代は、館を構えた在地領主を中心とする「点の支配」に留まり、城の配置を必要とする支配構造になかった。それが、14世紀半に世の中が騒がしくなると戦の副産物としての城が重要性を増した。建武の新政を皮切りとする南北朝時代の争乱期が到来したのである。中央の動きでは、元弘元年（1331）9月に河内国で赤坂城の攻防戦があった。鎌倉幕府軍が、楠木正成が拠った赤坂城を攻めた戦いである。元弘3年（1333）3月には、幕府軍が正成の千早城攻略に失敗した。両城跡は、この時期の城として古くから良く知られている。

しかし、この時期の城は、所在地や縄張りの不明なものが多く、我々が抱く城の概念と多少異なる様である。山や丘陵の高所を城に見たてて、自然地形をそのまま縄張りに活用した可能性が高い。実際、『新熊本市史』の編纂時に、文献から抽出された南北朝時代の城跡の調査を試みたが、ほとんど城跡地を確定できなかった。発掘調査で時代が実証された城跡も数が限定されている。県内では、唯一、球磨郡山江村の山田城跡がこの時期の本格的な山城として知られるに過ぎない。この城跡の場合、中世文書に城に関する記述があり、九州縦貫自動車道の建設時に、県文化課で大規模な発掘調査が実施され、この時期の遺物が数多く出土した。城跡内に、確たる縄張りも有しており、例外のケースである。

中世城が全国的にピークを迎えるのは、15世紀後半の戦国時代からで、この時期、中世文書に数多くの城名が登場する。肥後では、特に阿蘇大宮司家や菊池氏の活躍が目立ったが、両氏とも、その後、更なる勢力拡大に至らず、ついに戦国大名になり得えなかった。16世紀になると次第に衰退し、代わって、両氏らの家臣団が土豪として、個々に独立していった。彼らは、肥後で「国人・国侍」といわれ、全国的に「国衆」と呼ばれた。彼らは、豊後の大友氏・薩摩の島津氏・肥前の龍造寺氏らの外部勢力をを利用して、徐々に小領主へと成長していった。したがって、この時期、必然的に城の数も急増した。本城を核に籠集落を形成し、陸路や海上・河川交通の要所に支城を配置して、領域境の山の稜線にも物見や連絡用の砦を築いて守りを固めた。こうして規模の差異はあったものの、各地域で「面の支配」が行われたのである。隈部氏も土豪の一人であった。隈部館を中心として、上永野地区に大規模な籠集落を形成し、背後の高所に猿返城や米の山城が配置された。菊池市での有名な「菊池十八外城」は、これを大規模に具象化したものである。

豊臣秀吉の九州統一後、肥後では国主に任命された佐々成政に対して、天正15年（1587）に52人の国衆が

蜂起した。世にいう「肥後の国衆一揆」で、首謀者の一人が隈部親永である。一揆は、菊池城～城村城～田中城へと展開したが、最後は、秀吉の差し向けた毛利氏軍などに鎮圧された。これを契機に、肥後に残存した中世的旧勢力が、ほぼ一掃された。天正16年（1588）には、加藤清正と小西行長が肥後に入国したが、この時期、肥後には、まだ中世城と呼べる城塞が各地に残存していた。文献記録にある城は、〔加藤領〕河尻城・菊池城・小代城・大津山城・内牧城・田浦城・佐敷城・津奈木城・水俣城。〔小西領〕隈庄城・木山城・矢部城・八代麓城。両氏は、これらの城に城代を置いて統治した。近年、破城の実態が明らかになった鷹ノ原城は、加藤氏の入国後に築かれたものである。

天正17年（1589）には天草合戦が勃発したが、小西氏が加藤氏の支援を受けて鎮圧すると、これを最後に肥後の国衆は壊滅した。しかし、その後も残存中世城は、まだ肥後の歴史に城名を残している。文禄元年（1592）6月に、島津家臣の梅北国兼が、朝鮮出兵の留守を狙って佐敷城を破り、続いて麦島城を包囲する事件が起きている。この梅北の乱は、あえなく終わったが、秀吉は、中世的土豪の反撃として極めて重視し、これを契機に、意に従わない状態の島津歳久を処分した。肥後でも、秀吉の指示によって、熊本城にあった阿蘇惟光が花岡山で斬首されて、阿蘇大宮司の地位が途絶えた。

幕府の命令により、中世城が姿を消したのは、元和元年（1615）の「一国一城令」である。「一国に一城しか城を認めない」との幕府の命令であった。それでも肥後では、熊本城の他に、島津氏対策という理由で八代松江城が存続した。この法令で、残存していた中世城も姿を消した。

寛永14年（1637）に起こった天草・島原の乱は、キリストン信徒の信仰の厚さが改めて再認識され、幕府は、鎖国体制の完備を急いだ。慶安4年（1651）に、肥後藩が幕府に提出とした差出『肥後国一慶安四年江戸江差上候御帳之扣』には、全部で61城跡の実態が報告されている。この中で天草郡は15城跡、益城郡は13城跡が対象とされている。両郡で約5割を占める数の多さである。乱後、17年を経過しているが、まだ乱の後遺症は、残っていたのであろう。天草郡は言うまでもなく、益城郡はキリストン大名の小西行長が、慶長3年（1598）まで統治した経緯がある。幕府は「古城は、反乱者の拠点になる」として神経を尖らし、両郡に対して特に、詳細な報告を藩に求めた。その後、古城は、江戸時代に編纂された地誌などに城名を留めることになる。ただし、城郭専門書ともいえる『古城考』に記載された城跡数は275城跡に過ぎない。平成10年度の時点で、熊本県文化課が把握している中世城跡は533城跡。大方が、無名の城として郷土の歴史の中でさえ、埋没したのである。

現在、県が把握している中世城跡は533城跡。これに古代山城の鞠智城跡と、近世城の5城跡（熊本城・宇土城・八代松江城・富岡城・人吉城）、中世城と近世城の過渡期にあたる3城跡（鷹ノ原城・麦島城・佐敷城）があり、計542城跡に及ぶ。平成の市町村大合併で死語となつたが、つい最近までは、熊本県下94市町村の中で城跡を有しない行政機関は、産山村・鏡町・泉村・五木村の一町三村に過ぎなかつた。まさに「一村一城」の状態であった。

その中にあって、隈部館は、戦国時代後半の館跡と見なされる。特色は、標高340～370mラインの山腹に位置しながら、石垣を伴う枠型遺構の虎口をはじめ、庭園遺構や主殿・会所と推定される礎石建物跡が現存しており、県内でトップクラスの城館跡として位置づけられてきた。背後の高山には、猿返城や米の山城と呼ばれるネットワークを形成する砦が配置されており、山中の谷間に「^{かこい}」の地名を残す小集落の存在も興味深い。さらには、上永野地区の広域な麓集落の存在も特筆される。

※『菊水町史』通史編 2007年 第四編 中世
大田幸博著：第五章 第一節 肥後の中世城跡 に一部加筆した。